

2015年度 地理環境学コース修士論文要旨

イタリア・ナポリにおける都市空間の変容—景観とまちづくりの多様性の観点から—

高橋 詩織

本稿の目的は、イタリア・ナポリを事例に、都市の再創造の可能性を探ることである。理論的枠組みをなす第2章では、N. スミスのジェントリフィケーションの議論を引き合いに、再開発における負の面を指摘したうえで、その克服を示唆するD. ハーヴェイの都市コモンズの議論や、都市コモンズの原理を都市開発に応用する試みを考察した間宮・廣川の議論などを再検討した。そこから、都市形成における重要な要素として、都市コモンズだけでなく、景観の重要性や都市の持続性、市民性を指摘した。そして、第3章ではツーリズムの概念を再検討し、第2章で述べた行政権力・資本による都市コモンズの破壊をツーリズムによる「観光のまなざし」や「演出される真正性」が助長し、結果的に場所や景観の均質化を招いてしまう危険性があることを指摘し、そうしたグローバル化に陥らずに、いかに「ローカル化」を目指すかが鍵であるとした。

第4章以降では、「ローカル化」を一部体现する都市としてイタリアの都市空間、とりわけナポリにスポットライトを当て、権力と資本に飲み込まれることなく、急速な都市化や社会経済の変化に対抗するまちづくりの在り方、都市コモンズ的なものを受け継ぐ都市の在り方を考察した。まず第4章では、イタリアにおける観光業の重要性、観光業における景観をはじめとする都市形成の重要性を指摘し、イタリアにおける都市計画・政策を振り返った。「公共住宅建設法（865号法）」に端を発する変革は、公共住宅行政の権限を市町村（コムーネ）にもたせた。急速な都市化や社会経済変化に抵抗する潮流はイタリア全土に広がり、ナポリでも、歴史地区を擁する旧市街地の修繕と保存が行われた。第5章ではナポリの都市空間に焦点を当て、その歴史的都市空間の形成と現状、地下鉄など新たな再開発の動向を紹介した上で、ナポリという都市のもつ固有性を、ナポリ育ちの社会学者G. ライノの「スペイン人地区」における研究を引用しながら検討した。彼は、従来の欧米偏重の都市論に陥らずに、フィールドワークに根差して都市を読む在り方を考えようとしている。歴史的保全地区に隣接するスペイン人地区は、

過密や低所得者・移民の集住などから問題地区として悪評が高いが、彼はそれを「インスピレーションを掻き立てる流動的かつクリエイティブな場所である」と評価している。

第6章では、結論として、こうした権力や資本の台頭に対抗したのは、旧市街地の荒廃で生計に打撃を受けていた零細な商工業者たちをはじめとする、紛れもない市民たちであったことを指摘した。「社会的保存」と呼ばれているそれは、反ファシズムの潮流という側面もあったであろうし、都市の共有財産としての風景、生活者である自分たちの身体性が刻み込まれた空間を守ろうとする精神、あるいは都市国家を築き上げてきた血に流れる独立精神に起因するものであったのかもしれない。ファシズム期の社会主義的な都市政策は、強制的な圧政の面もありながらも厳格な全体主義によって私有化を抑えたため、資本の入り込む隙を与えなかったとも評価できる。さらにそのファシズムに反抗する闘争によって、市民の自治や政治参加が促されて前述した法整備を実体化する結果となった。ナポリが築き上げてきた多孔性、流動性を維持し、発展させていけるような在り方をさらに積み上げていければ、「暮らしやすさ」と「固有性・独自性」が共存する新たな都市空間の模索に道筋を見出せるかもしれない。

（主指導教員：熊谷主知）

在日定住中国人女性の経験とトランスナショナル・アイデンティティ・居場所と「ホーム」の観点から—

陳 思羽

近年、世界的な規模で国境を越えた人の移動が活発になっている。この30年の間、日本に定住している在日中国人の数はさらに増加する傾向を示している。女性は、一般的に結婚とそれに伴う移動を通して、その生涯で男性より複雑なプロセスを経ている。在日中国人女性たちが、この過程において自分のトランスナショナルなアイデンティティをどう形成、変化させていくのか、また周囲との相互作用の中で自分の居場所とホームへの認識がどう変化していくのかを考察することが、本研究の目的である。さらに、それを通じて多文化共生社会としての日本の課題も考えたい。

本研究では、10名の在日中国人女性に、ライフヒストリー・インタビューを行った。その経験の分析を通して、居場所とホームの視点をふまえて、日本での経験とトランスナショナル・アイデンティティの形成を考察した。インタビュー対象者は、来日経緯により二つのグループに分かれる。一つは留学生として来日した女性5名（配偶者は中国人男性）、もう一つは国際結婚により日本に来た女性5名（配偶者は日本人男性）である。具体的な特徴は以下の通りにまとめられる。

留学生として来日した女性たちは、日本での暮らしは大変ではあるが、それなりに生活設計ができ、子供をバイリンガルに教育して、将来は海外に送りたいという、コスモポリタンな志向性を持っている。日本と中国の良いところと悪いところ、両方を冷静に見つづ、二つのホームを併せ持つ今の自分の立場を肯定的に捉えていた。留学生であった彼女たちは、日本の教育を受け、アルバイトや就職を通して日本社会へ参入する過程の中で、自分の認識や子育ての方針なども、トランスナショナルになっていることがインタビューを通じて伺えた。

これに対して、国際結婚を通して日本に来た女性たち、中でも日本語が十分でない二人の女性は、日本での暮らしに適応できず、中国に帰ることもできず、二つのホームの狭間に落ち込んでしまっていた。言葉ができないために、日本の家のしきたりに馴染めず、地域社会にも入り込めず、疎外感を味わいながら、子供のために帰国を思いとどまって耐えていた。こうした状況下でも、積極的で家族との関係が良好な女性は、自らの居場所を構築することに成功していた。しかしいずれの女性たちにおいても、子供は中国語を話さず、母親との間に距離が生まれているとことが見てとれた。ただし国際結婚により来日した中で1名は、中国の大学で日本語を専攻していて、また夫が中国で暮らしていた経験があり中国語ができるということで、留学生として来日した5名に近い位置にいた。

ホームは、いろいろなスケールから捉えられる。人生の段階で、様々な要因に影響され、いろいろな体験を積み重ねた上、トランスナショナルなアイデンティティを形成し、変化させていくと考えられる。インタビューを通してわかったのは、第1に、トランスナショナルになるためには、居場所やホームを構築することが必要だということである。日本である程度の社会経済的な地位があり、生活上の困難がないことは、在日中国人女性にとって家族が自らのホームとなるための

重要な条件である。第2に、言語である。言語を習得せず国際結婚で来日した後、言葉が通じないことで、長年疎外感を味わっている女性たちの孤独は深い。

こうした在日中国人女性たちの切実な思いや苦境は、日本社会に共有されているとは思えない。長期的に言語を教えることに加え、地方自治体や各コミュニティにおいて外国のことをよく理解でき、日本人の立場だけではなく、外国人の立場から、問題を仲介できる役割を担う通訳兼相談者のような存在を置くことが大事ではないかと考える。日本社会の中で、マイノリティが声を上げることは難しい。マジョリティである日本人の側が積極的に彼らに手を差し伸べていかないと共生社会の実現は難しいのではないかと。

（主指導教員：熊谷圭知）

「チャイ (chay)」から見るウイグル族社会の日常生活文化とその変容ー「第三の場所」と社会関係資本の視点からー

シャチクリ・メルシャト

本研究の目的は、新疆ウイグル自治区の都市において近年流行している「チャイ (chay)」という慣習を取り上げ、そのウイグル族社会における現代的意味を探ることである。「チャイ」は、ウイグル語では、単に飲み物としてのお茶や、お茶会のことを指すのではなく、独特の深い文化性を含んでいる。ウルムチ市で流行する「チャイ」の定義を述べるならば、「固定的なメンバーが定期的集まって、もっぱら家・職場以外の場所で、会費制で行われるお茶会であり、そこで関係性がつくられる場所」といえる。本研究が注目するのは、家庭でもない、職場でもない、「第三の場所」で行われる「チャイ」が、「人々の交流」や「信頼」を強化することで、新しい社会関係資本を形成する契機になっていることである。研究方法は、基本概念、およびウイグルの歴史文化に関する文献・資料のほか、ウルムチ市でのフィールドワークに基づく参与観察、質問紙調査、インタビュー調査によっている。

論文の構成は以下のとおりである。第1章で研究の目的と方法を示し、第2章で「チャイ」の具体的な実例を紹介した。第3章では、本研究の分析枠組みである「第三の場所」と「社会関係資本」の概念を先行研究に基づき論じた。第4章では、研究対象地域である新疆ウイグル自治区とウルムチの現状を概観し、第5章では、ウイグル族の民族文化の文脈から「チャイ」

の起源を考察した。第6章では、ウルムチ市在住女性62名へのアンケートとインタビューを通じて、参加者が「チャイ」の目的と機能をどのように認識されているかを示した。それによれば「人間関係の構築」「友人に会える」「楽しみ」以外に、収入の低い階層においては「一時にまとまったお金を手にできる」ことが重要な目的となっていた。第7章では、「チャイ」とジェンダーのかかわりを論じた。現代ウイグル社会では、女性が自らの収入を得るようになってきているが、男性に比べれば自由に外に出られるわけではなく、女性にとって「チャイ」が男性からも承認された楽しみと人間関係構築の機会を提供していることがわかった。第8章では、「チャイ」を通じて社会関係資本を構築している例として、貧しい子供たちの支援をする女性たちのチャイ（「優しいお母さん」）とその影響を紹介した。

「チャイ」には、グローバル化する現代社会の中で、ウイグル文化を継承しつつ、新たなセーフティネットを構築する「場所」を提供するという意義がある。もともとウイグル民族の文化には緊密な相互扶助の慣習が存在したが、変容・流動性の激しい都市社会の中では、こうした共同性を維持することは難しく、家族や個人が孤立・分断されやすい。しかし、「チャイ」という場所を通じ、定期的に関係性が継続・更新されることで、人々は不慮の事態に備えるネットワークを構築することができる。現在のウルムチ市の都市社会の現状では、ウイグル社会内部の貧富の格差も発生し、貧困者・弱者への支援、相互扶助の必要性もどんどん増えている。人間関係を構築し、情報を交換する場所を持つことは、人々にとって流動性の激しい現代社会の中で重要で貴重な資源となる。現代ウルムチ社会における「チャイ」は、ウイグル族にとって「第三の場所」であると同時に、変動する都市社会を生きていく上で必要な「社会関係資本」となっていると言える。

（主指導教員：熊谷圭知）